

ニューズレター

No. 105

低平地研究会 (LORA), 国際低平地研究協会 (IALT)

<https://lora-saga.jp/> <https://lora-saga.jp/ialt/>

☎840-8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学理工学部内 TEL/FAX : 0952-28-8712 令和4(2022)年10月26日

都市空間部会主

初心者のための GIS 講習会の開催

7月15日(金)9:00~12:00及び7月28日(木)9:00~11:45に、佐賀大学理工学部3号館会議室にて、低平地研究会都市空間専門部会・部会長の猪八重氏を講師に、地理情報システム(GIS)の講習会を開催しました。参加者は2日間でのべ22名で、前半はGISの基本的な仕組みや地理情報を扱う上で欠かせない座標系等についての話があり、後半は実際に参加者がGISを体験しながら、GISの基本操作や分析手法について学びました。

参加者からは、特にデータの入手方法やデータ解析の手法についての質問があり、今後GISをそれぞれの研究や業務で活用していくためのよい機会となったものと思われます。



講習会の様子



基盤整備専門部会

有明海沿岸道路 見学会への参加

10月20日(木)に有明海沿岸道路工事現場と昇開橋の見学会に佐賀大学理工学部都市工学部門の学生とともに参加しました。有明海沿岸道路の現場見学は国土交通省九州地方整備局有明海沿岸道路工事事務所の主催です。訪問した工事現場は、11月12日(土)に開通を予定している諸富IC-大野島IC区間で、事業概要の説明を皮切りとして、有明早津江大橋、地盤改良工、橋梁下部工の現場を紹介していただきました。

浅層や深層混合処理工法といった軟弱地盤対策のほか、橋台下に適用されている杭打ち工法が説明されました。橋梁部は世界遺産の三重津海軍所跡が隣接していることもあり景観にも十分に配慮しつつ、耐風安定性と圧密沈下へのリスクが低い鋼アーチ橋が採用されたとのことでした。

その後には、新旧橋梁の比較のために、昇開橋も訪れました。見学会を通して、参加された会員から積極的な質問や解説もあり、参加した学生にとっては大変ありがたい機会となりました。



有明早津江大橋での記念撮影

低平地研究に関する豆知識 -その 35-

エツと弘法大師と遣唐使船

筑後川の河口でしか取れないエツ（斉魚・刀魚・銀刀魚）は、カタクチイワシ科で体長 30～40cm ほどで身は薄く、銀色の細かな鱗に覆われた透き通るような魚である。4 月下旬頃、筑後川を遡って 6 月から 8 月に下流の水域で産卵する。料理法は刺し身・あらい・煮物・塩焼き・あらだき・てんぷら・南蛮漬け・酢のものなどで、小骨が多いため鱧のように裏表に 200 回以上の包丁を入れる。

このエツについては次のような伝説がある。筑後川の河口に身なりの貧しい旅の僧が佇んでいた。対岸へ渡ろうとしたが誰も相手にしてくれず、見かねた老漁師が自分の舟で渡してくれた。この老漁師の親切に感謝した旅の僧は、お礼に「魚のとれないときは、この魚をとりなさい」と岸辺の葦の葉をとって川に流した。アシの葉はエツに姿を変えて泳いでいった。この貧しい旅の僧の正体は弘法大師であった。（『諸富町史』から要約）このときの弘法大師は、遣唐使として唐に渡って帰国した直後であった。つまり、遣唐使船は有明海の湊に帰ってきたことを説明しているのである。大善寺の荊津(おどろつ)、筑後の瀬高、玉名町の高瀬は遣唐使船の寄港地であった。有明海の入りは天草の牛深港であり、北の玄界灘から有明海に入る場合は、大村湾から諫早市の船越を越えて有明海に入るのである。牛深と船越は海の交通の要衝だったのである。

（矢野生子：長崎県立大学経営学部）

嘉瀬川ダム竣工 10 周年記念感謝祭の共催

基盤整備部会の共催で「嘉瀬川ダム竣工 10 周年記念感謝祭」（主催：嘉瀬川ダム竣工 10 周年記念実行委員会、(一社)古湯・熊野川温泉刊行コンベンション連盟）が開催されます。お誘い合わせの上ご参加ください。



日時：11月6日（日）10:30～18:30

場所：しやくなげ広場（嘉瀬川ダム管理支所前）

※詳しくは低平地研究会ウェブサイトのお知らせをご覧ください。 <https://lora-saga.jp/>

会員限定 研究会ウェブ図書室

地域創生専門部会 刊行物の公開

1996 年から現在までに刊行された地方創生専門部会（旧経済部会）の研究成果刊行物を新たにウェブ図書室へ追加いたしました。閲覧に必要な ID/パスワードは、7 月発送の会費請求書に同封しております。不明な点は事務局へお問い合わせください。

地域創生専門部会 ウェブ図書室資料の紹介

経済学と佐賀・有明海の歴史

「理論経済学者が何故歴史を語るのか」とよく問われる。私の答えは、「経済は歴史である」という言葉に尽きるのである。人々は、食べて、遊んで、寝る。これが毎日の繰り返しである。食べて遊ぶのは食文化であり、芸術であり、スポーツである。しかし、食べるためには食料を獲得しなければならない。遊ぶためには、工夫が居るし、時間的余裕が必要である。食料を獲得するためにも遊ぶためにも、金が必要である。そのためには、働かなければならない。時間的余裕とは現代においては、働かなくて良い時間のことである。働くためには、仕事が必要である。利益が出ない仕事は長続きしない。これが農業であり、工業であり、金融であり、物流である。これらの総体が経済なのである。

佐賀大学に「低平地研究会」が作られた時、「経済専門部会」を任された。「佐賀県内の産業や地場産業、地方行政について調べるのですか?」と聞いたら、「もっと面白いことを考えろ!」と宮崎善吾氏に言われた。そこで、低平地研究会と経済専門部会との関連で、有明海と佐賀の経済の関係を調べるようになった。この結果が壬申の乱の舞台としての「有明海と淡海」とか徐福の「交易の海・有明海」という報告になって行ったのである。

やがて、この問題意識の派生として、筑後川や嘉瀬川・塩田川にまつわる物語や背振山と山岳仏教との関係が必要になっていったのである。

このような仕事を続けるうちに、気が付いたら、古田武彦氏の「九州王朝論」の基礎を構築する作業に参加していたのである。

（大矢野栄次：久留米大学名誉教授 地域創生専門部会）

環境専門部会 国際セミナーの開催

本年度も、インドネシアとベトナムの低平地に立地する 3 大学と連携して低平地に関する国際協働セミナー（ASIAN Collaborative Seminar Program on Lowland Technology 2022）を 11 月 28 日（月）から 12 月 8 日（火）の予定で、オンラインにて開催いたします。講義、ビデオツアー、ポスターセッションで構成され、各種コンテンツを Facebook で閲覧できるように準備する予定です。

会員の皆様もご参加いただけますので、事務局へご連絡いただくと Facebook を通して招待いたします。

編集後記

息子が植えたひまわり、なんと台風直撃を凌ぎました。それを称えての今号ニューズレター掲載となります。編集：三島悠一郎、後藤、武富 (lora@lora-saga.jp)